

〔病虫害の発生概況〕

〔病害の発生概況〕

昭和53年1月は移動性高気圧がはり出し暖冬であったが、2月には冬型気圧配置にもどり、3月には全般的に雨量少なく多照となり、4月は再度低温に経過し、5・6月は高温・多照で経過した。このように変動の大きい気象条件であったため、特徴のある発生概況を示した。麦類の病害ではうどんこ病が南九州を中心にやや多発から多発し、黒節病が北部九州にやや多目から多発生となった。また、早播きと生育が促進されたために縮萎縮病の発生が北九州を主体として目立った。麦の出穂以降の5・6月が多照・少雨となったため、赤かび病の発生が抑えられ、ごく少発生にとどまった。梅雨入りは6月10日(平年より3日遅れ)、梅雨明けは7月5日(平年より14日早い)で空梅雨となり、7月は高温・多照で雨量は極端に少なく経過した。7月6半旬から8月にかけて一時ぐずついた気象となったが、その後は高温・多照・寡雨に推移した。9月15日に台風18号が北九州に接近したが雨量少なく実被害は軽微であった。このため、葉いもち、穂いもちともに全般的に少発生にとどまり、白葉枯病の発生も近年にない少発生となった。もみ枯細菌病はここ2～3年前から九州各県とも発生程度に年次変動はみられるが、確実に定着したとみられる。本年も北九州を中心にやや多から多発したところが多い。概して本年度は好天にめぐまれ全作物を通じて病害の発生は少なく経過した。

稲・麦病害

いもち病の発生は全般的に少発生に経過した。葉いもちが大分県で補植苗の放置が原因して中山間、山添地帯を中心に多発したが、その後の好天と防除の徹底によって発生程度は並からやや少目に抑えられた。その他の県では例外なく少発生にとどまった。穂いもち出穂前後から9月下旬まで高温・多照・寡雨に経過したため少発生にとどまり、被害もごく少なかった。白葉枯病は殆どどの県で近年にない少発生となった。台風18号の影響をうけ一時病勢が進展した所(佐賀、長崎)もみられたが、その後再び停滞した。苗代、本田初期の浸冠水がなかったこと、ほ場整備、河川改修による保菌雑草の根絶、生育後期の高温・多照が感染量の低下、病勢進展の抑制につながったとみられる。紋枯病は初発生期が平年並からやや早く、生育初期が高温であったため、稲の生育がすすみ過繁茂となり発病株が増加し、全般に並からやや多

目の発生となった。また、台風18号により倒伏した地帯ではその被害は助長された。しかし、トビイロウンカとの薬剤同時防除の徹底、9月の少雨、乾燥により実被害はそれ程でなく経過したところが多い。もみ枯細菌病は九州各県に定着したように見受けられ、過去2～3年着実に発生面積の増加傾向が顕著である。北九州を中心に福岡、佐賀、長崎、熊本各県はやや多から多発生となり、他の4県は並から少発生となった。早生品種で多発したところと晩生品種で多発したところと一定していないが、原因として出穂時の高温と降雨の有無を指摘している例が多い。原種ほ、原々種ほ場に発生した例も多く今後の発生動に留意が必要である。ウイルス病は縮萎縮病が福岡でやや多発したほかは概して各県とも少発生にとどまった。九州本土でわか病の発生は認められず、萎縮病も少発生にとどまった。

麦類赤かび病は出穂以降殆んど降雨なく好天にめぐまれたため、各県ともごく少発生となり、例年にない多収年となった。さび病は福岡、大分県でやや多発したが程度は軽く、他は少発生にとどまった。うどんこ病は全般に多発し、南九州、大分長崎各県でやや多から多発生となった。黒節病は北九州を中心に多発し、全般的に拡大傾向がみられる。縮萎縮病は福岡、佐賀で多発したが実被害は軽微であった。小麦黄さび病が福岡県で10年ぶりに少発ながらみられた。夏まき麦に穂いもちが発生し、イネいもち病菌の感染、発病であることが確認された。

野菜病害

高温・少雨が続きアブラムシの多飛来したため、モザイク病が施設、露地栽培をとわず多発生した。キュウリモザイク病は各県とも多発し、佐賀ではWMV、長崎ではWMVとCMVの混発、熊本ではCMVが主体であった。うどんこ病も各地で多発し、キュウリ(長崎、宮崎)、ニンジン(長崎、鹿児島)、イチゴ(福岡)、ピーマン(大分、鹿児島)、エンドウ、カボチャ、メロン(鹿児島)が著しかった。灰色かび病は前年に続きペノミル、チオファネートメチル耐性菌の出現が問題となりキュウリ(長崎、大分、宮崎)、レタス(長崎)、ピーマン(宮崎)、トマト(大分)に多発した。べと病はタマネギ、ネギ(佐賀、長崎)、レタス(佐賀)、キュウリ(宮崎、鹿児島)、キャベツ、ハクサイ(鹿児島)にやや多発した。ネギさび病(大分、長崎)、キュウリ、スイカ急性萎凋症状(大分、宮崎)、キュウリ、スイカつる枯(宮崎、鹿児島)、ラッキョウ白色疫病(鹿児島)、レ

タス軟腐病（長崎は露地，大分は夏秋），メロン，トマト疫病（佐賀，宮崎），イチゴ青枯病（福岡），バレイショ（長崎，ハウス1～2月）がやや多から多発した。イチゴ品種「はるのか」連作ほ場ですくみ症状が増加（大分）し，イチゴ仮植床で *Phytophthora* 菌による立枯症状（佐賀）が発生し，トマト黒点根腐病が長崎で初発生した。夏大豆の紫斑病が水田転換畑でとくに発生が多かった（鹿児島）。

果樹・茶病害

高温・多照・寡雨のため多くの病害が少発生となったカンキツ類ではそうか病（果実，熊本，宮崎），炭そ病（宮崎），かいよう病（沖縄），ブドウではブドウベト病（大分）がやや多発したにとどまった。茶病害ではもち病，網もち病（大分，沖縄），炭そ病（大分）がやや多発した。かき円星落葉病が福岡でやや増加傾向がみられている。

特用作物

サトウキビ葉焼病，葉片赤斑病，黒穂病が鹿児島でやや多から多発生，沖縄では葉片赤斑病が並からやや多発生となった。イグサ紋枯病が沖縄北部で3月頃からみら

れ，5月末から6月中旬にかけて多発生した。パイナップル心腐病が2～3月に新植したほ場と台風通過8月から9月にかけてやや多発し，バナナ斑葉病が長雨と少照のために沖縄で多発生した。

〔害虫の発生概況〕

本年の特徴は，水稻ではトビイロウンカとコブノメイガが多発し，また本年からはじまった水田利用再編の転作大豆にハスモンヨトウが，飼料作物にアワヨトウが異常発生したことである。

水稻・いぐさ

トビイロウンカの初飛来は6月11日で平年に比べ早く続いて第2波は6月30日～7月2日で，普通期栽培では第2波が主体となった。飛来は2波にとどまり，飛来量もさほど多くはなかったが，夏期から秋期の高温により増殖は盛んとなり，被害は多発した。セジロウンカは平年並～少発生であった。コブノメイガもウンカ類と同時期に飛来し，高温の影響により被害は増大した。

全地域でアワヨトウが多く，特に転作の飼料作物から水稻へ移動して加害した。カメムシ類は越冬密度が高く

昭和53年 水稻主要病害虫の発生状況

(発生面積ha)

病害虫名	福岡	佐賀	長崎	熊本	大分	宮崎	鹿児島	沖縄
(病害)								
葉いもち	7,558	6,367	10,000	17,000	25,872	31,148	20,013	463
穂・枝梗いもち	22,024	4,703	1,500	9,300	21,799	25,237	13,104	181
紋枯病	46,454	8,780	19,000	35,000	37,643	34,273	35,559	392
白葉枯病	853	2,291	300	6,300	1,796	9,362	2,848	103
稈枯細菌病	24,066	6,914	5,000	10,000	1,021	603	4,337	
縞葉枯病	16,977	230	500	100	2,536	512	340	—
萎縮病	30,614	961	7,800	12,000	10,510	11,609	18,263	—
黄萎病	0		0	—	0	458	195	
ごま葉枯病	27,487	7,990	6,000	5,500	15,123	11,953	20,306	400
小粒菌核病		131	3,000	6,300	7,189		3,041	0
心枯線虫病	223	2	4,600	1,500	6,876	3,791	9,038	33
(虫害)								
ニカメイチュウ(第1)	354	5	1,900	3,500	6,276	3,360	338	} 91
(第2)	339	0	1,100	5,500	997	977	380	
セジロウンカ	54,742	7,155	22,000	29,500	17,679	17,523	15,005	60
トビイロウンカ	57,209	12,512	22,000	31,000	27,022	26,589	20,896	52
ヒメトビウンカ	43,891	1,912	4,500	9,600	14,346	19,247	2,302	
ツマグヨコバイ	65,352	61,446	13,000	21,000	29,503	36,181	29,894	449
イネツトムシ	12,960	2,458		4,000	10,552	1,240	10,067	1
コブノメイガ	55,480	9,833	22,000	24,000	21,495	21,892	25,725	226
フタオビコヤガ			150	2,500	4,501	3,750	1,988	0
アワヨトウ	6,286	10,291	480	1,000	615	1,961	970	121
イネゾウムシ	4,223	2,423	2,200	7,500	11,069	2,441	2,760	
カメムシ類	5,085	470	13,950	7,000	10,098	7,261	6,712	56

早期稲では多発して斑点米も多かった。普通期水稲でもカメムシ類は多目であったが、斑点米は一部の早生種以外では少なかった。そのほか、イネツトムシは局部的に多目、イネゾウムシは発生量は少なかったが、各地で平坦地へ拡がっている。

イグサシンムシガは越冬密度が低く、防除も徹底して少発生で、例えば福岡県では平年の1/2、昨年1/4の発生にとどまった。

転換作物

全地域を通じて、水田大豆でハスモンヨトウが多発し被害は甚大であった。大豆を食害したのち、秋期にはイチゴ、バレイショ、秋野菜などへ移行加害した。そのほか、大豆では幼苗期にスリップス類、結莢期以降にカメムシ類も発生した。飼料作物には各地でアワヨトウの発生が多かった。

野茶・畑作物

各種野菜や畑作物で高温少雨のためアブラムシ類が多発した。オンシツコナジラミは5月に鹿児島県ではじめて確認された。各地でピーマン、キュウリ、ネギ類、豆類にスリップス類の発生が多かった。そのほか局部的に多かったのは、バレイショにニジウヤホシテントウムシ及びジャガイモガ(佐賀・長崎)、ハクサイ、ネギのほかバレイショにヤサイゾウムシ(長崎)、夏播ニンジンにネキリムシ類(長崎)、ハクサイにナノメイガ(長崎)、ヨトウムシやハイマダラメイガ(大分)、エンドウにエンドウハモグリバエやウラナミシジミ(鹿児島)、キャベツ

にウワバ類(大分)などであった。

畑作物では、鹿児島県大隅地区でサトイモにセスジイッポンスズメの多発が昨年から続いており、カンショにナカジロシタバ(南九州、沖縄)が多かった。サトウキビではカンシャクシコメツキ、アワヨトウ、トノサマバツなどが多発した。

果樹・茶

各地でチャバネアオカメムシを主体とするカメムシ類が多目で、8月中・下旬以降一部の地方で早生温州、ナシ、カキなどに被害が発生した。高温少雨の影響で全般的にハダニ類、アブラムシ類が5～6月、あるいは秋期に多目であった。近年、ミカンでは価格の低迷により放任園や防除不徹底園が増加し、これが発生源となるカミキリムシ類、カイガラムシ類の多発が続いている。

以上のほか、局部的に多目であったのはチャノキイロアザミウマ(大分・宮崎)、クリタマバチ(熊本・大分・宮崎)及びバナナセセリ(沖縄)であった。奄美群島では誘引剤による防除の徹底でミカンコミバエが根絶寸前の状態である。

茶では全地域でクワシロカイガラムシ、チャノミドリヒメヨコバイが多発した。ハマキムシ類は全般的に少なかった。局部的にはチャノキイロアザミウマ(中・南九州)が多目であった。本年、ヤシノシロカイガラムシ(鹿児島)とミカンマルカイガラムシ(熊本)が茶樹の新害虫として確認された。

(九州農業試験場 環境第一部)